

みどりのゆびの指さす方角

吉本ばなの小説を読む

●名古屋市立工業高等学校教諭

安田正典

(やすだ・まさのり)

はじめに

吉本ばなの小説「みどりのゆび」(『体は全部知っている』文藝春秋、所収)は、「おばあちゃん子」として育った主人公(「私」)が、祖母の死という現実に向き合い、苦しみながらそれを受け入れてゆく過程を描いた小説であり、同時にその祖母を介して愛すべき植物たちと出会い、自らのうちに祖母と同じ血を発見し、「みどりのゆび」の持ち主として新たな人生に踏み出してゆく過程を描いた小説です。喪失と獲得の物語、生と死をめぐる物語と言ってよいかと思えます。「私」は祖母の死をどのように受け止めたのか。祖母の死は「私」に何をもたらしたのか。そして「私」はどこからどこへと向かってい

るのか——すべて重要なことは心の中で起こっています。小説の中から、二つの印象的な場面を取り上げて、この問題を考えてみましょう。

二つの風景

私と妹が幼いころ、うちではみんなそこでいろいろなことをした。御飯を食べたり、けんかをしたり、TVを見たり、妹とお金を出し合ってケーキを買ってきて食べたりした。デパートの袋に入った母の下着と、今晩のおかずになる干物がいっしょに載っていたりもした。二日酔いの父がそこに突っ伏して寝ていることもあったし、中学生で初めて失恋した妹がワインをあおり、酔っぱらっていすからずり落ちて頭を打ったこともあった。あの小さい四角が家族の象徴だった。生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所だった。妹は最近嫁に行って家を出ているし、テーブルはそこにあるが、家族全員がそこに集うことはめつたにない。母がそこでTVを見ながら編み物をしていることが多い。風景はそうやって変わっていく。

「生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所」という言葉に端的に示されているように、「家族のテーブル」は、人間の生臭さ、未熟さが露呈する場所であり、互いにそれを許容し、受け入れる温かい場所、人が未熟さ、不完全さを隠さずにいられる場所、そういう関係としての〈家族〉を象徴する場所です。人は他者の体温を、肌への優しさ、温かさとして好ましく思う一方で、生ぬるさとして不快に感じたりもします。忌避と受容、抱擁と拒絶が同居するのが〈家族〉というものであるとすれば、「生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所」という小説の言葉は、まさにそのような〈体温〉の支配する場所としての〈家族〉のあり方を見事に捉えています。主人公はこの〈温もり〉の支配する場所から抜け出していくのです。これに対して妹は、最近「嫁」に行った、即ち、生まれ育った家の〈温もり〉からもう一つの〈温もり〉へと、もう一つの「家族のテーブル」へと移っていったと考えられます。

さてこれとは対照的な風景が小説中にあります。少し長くなりますがそのまま引用します。

私は無言で祖母の部屋に行き、遅くなってごめん、
と言いながら植物たちに水をやった。電氣をつけた

ら部屋にちりばめられている祖母のささやかな人生が蛍光灯の真つ白い光に浮かび上がった。ふかふかの座ぶとん、クリスタルの小さな花瓶。筆と硯、きちんとたたまれた白いエプロン。海外旅行で買った異国情緒あふるおみやげが並んだガラスケース、眼鏡、文庫本、小さな金の時計。古い紙のような、祖母のにおい。私はつらくなって電氣を消した。するとガラスの向こうには植物たちが息づいていた。外の明かりにふちどられるように、生き生きと緑色だった。さつきやった水の滴がきらきら輝いていた。暗い畳にじつと座ってそれを見ていたら、なんだか少しづつらくになってきた。これは一人の人が生きてきたあたりまえの足跡で、悲しくも苦しくもない、どちらかといえば幸せないものなのだという気がしてきた。悲しみに濁った目で見た第一印象で決めるものではないと植物が教えてくれたような気がした。ただ目を求め、水を求め、愛を求めて生きていくだけの美しい生物たちが。

主人公が祖母の部屋に一人たたくむ場面、「私」の心の転回点です。「ただ目を求め、水を求め、愛を求めて生きていくだけの美しい生物たち」ということばに示さ

れるように、ここには生への無条件の肯定があります。「私」は植物たちのこの姿に励まされます。祖母はこの感情のうちに生きていたからこそ、幸福に生き、幸福に死ぬことができたのです。そして「私」もまたそのことに気づいたからこそ、祖母の死を受け入れ、自分も死後に「あんな清潔な部屋を遺したい」と願うことができたのです。「清潔」という言葉に「私」の感じ方がよく表れています。そこに暮らした人の生のあり方を象徴的に表しているという点では先に見た「家族のテーブル」の場合と同様ですが、ここには「家族のテーブル」にあった猥雑さがありません。「私」はこの「清潔さ」の中へと入ってゆくのです。

ところで、ここでもう一つ見ておかなければならない問題があります。それは、入院すれば毎日かわるがわるお見舞いに行く「結束の固い」家族であったにもかかわらず、その「家族のテーブル」の風景に祖母の姿がなかったという点です。——これは何を意味しているのでしょうか。

みどりのゆびの持ち主

祖母は近所のマンションの一室で「ひとり暮らし」を

しています。『スーブの冷めない距離』の行き来はあつたかも知れませんが、これは紛れもない現代の核家族の風景です。そして「私」もまた、自らの死を思い描く時、「ひとりでも、小さな部屋でもいいから」と言っています。たくさんの植物たちと見つめ合い、生命の輝きに包まれて、充足して生きているように見える「みどりのゆび」の持ち主のこの一見孤独とも見えるあり方は何でしょうか。主人公はこう語っています。

「にきびも傷も、治すから、花も咲かせるから、切らないであげて。」

祖母は夢うつつでまるでだれかのことばを聞き取るかのように、少しづつ、そう言った。私はぞうつとした。なんで私だけがこれを聞いてしまったんだろう？　と思つた。

「なんで私だけがこれを聞いてしまったんだろう？」——このことばは、〈選ばれた者〉としての自分のおのく主人公の感情をよく表しています。もちろんこれを偶然そこに居合わせたのが「私」だけだったというに過ぎないと見ることもできます。そばに母や妹がいたとしても祖母はやはり同じことを言ったかもしれませぬ。し

かし、主人公の受け止め方は違います。「私」は「そのこと」を後から来た母と妹に話しません。話せないのです。それはやはり「私」だけが聞くべきことばだったのです。

「ただ日を求め、水を求め、愛を求めて生きているだけの美しい生物たち」——その植物たちが、実は互いにつながっており、ひとつのアロエ、いやひとつのアロエと友達になれば、どこで見るとのアロエとも友達になる。そのつながりの中に「私」は入っていく——そのこと自体のうちに、すでにある種の〈孤独〉が潜んでいると考えられないでしょうか。「家族のテーブル」に象徴される人間生活のあたたかさは、同時に動物的な生臭さ、生ぬるさでもあります。それは閉じた関係の居心地良さです。〈植物の声を聞く人〉となり、「私」がその閉塞した場所から開かれた場所へ——一つの生命が別のところに生きるもう一つの生命へと、連続的に、しかも無限につながっていく——植物的な生の世界へと——抜け出していく時、おそらく「私」の生は、「ただ日を求め、水を求め、愛を求めて生きているだけの美しい生物たち」の生によって浄化されるのです。そして、その浄化された分だけ、身にまもっていた〈けもの〉的な生臭さが洗い流されていきます。自分も死ぬ時には「あんな清潔な部

屋を遣したい」ということばには、どこかにそういうカタルシス的なものが感じられます。祖母に「うち捨てられた」と感じた時の「私」とは確かに違っています。「私」は、父や母や妹の隣にしながら、父や母や妹とは違った場所で生き始めたのです。そういう「私」の父や母や妹からの〈距離〉が、この作品に微妙な陰影を与え、作品の味を深いものになっています。

「みどりのゆび」の指さす方向

こうして、祖母の死を通して「私」が変貌を遂げていくその過程、喪失と獲得が交差するその過程は、同時に、主人公が「家族のテーブル」といういわば哺乳類的ぬくもりの世界（「生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所」）から、植物と人とが異種交感するコズミックな世界へと抜け出してゆく過程に重なっていることが見えてきます。

吉本ばなの超自然的なものへの傾斜は他の作品にも見られる傾向であり、自選選集の第一巻を「オカルト」と題していることから窺われるように、作家自身ですでに自覚されているものです。しかし、「みどりのゆび」という小説をそういう観点からのみ読むのは危険です。

むしろこの小説の最も重要な部分は、主人公をそのような力の覚醒へと押し出してゆく心の過程にあると言えます。実際作家は、読者の関心がそういう超能力的なものへと傾斜し過ぎないように、巧みにバランスを取っています。例えば小説は次のように結ばれます。

昔はそのとげとげを憎らしく思い、日焼けの時にしか使わないのにとぞんざいに扱ってきたその葉に、私は手袋をはずして、そっと触れた。若い緑色はまるで宝石のように輝き、葉は絹のようになめらかにひんやりとしていた。人と握手をしたあとのように元気を出して、私は山道を登っていった。(傍線・傍点筆者)

擬人化は通俗と隣り合わせです。この小説の場合、アロエは常に「人」「だれか」として登場します。これは作品の主題の要請であり、避けられません。そしてその擬人化はセンチメンタリズムと結びつき易く、自我感情はしばしば対象を浸潤します。その危険地帯を、作家は注意深く、シヤベルとトロッコととげの痛みで通過し、鉦物の比喩と素手が捉える即物的な感触で突破するのです。

*

「みどりのゆび」に導かれ、その指し示す方角へと歩き出しながら、それでも「みどりのゆび」の持ち主は人の域を超えません。むしろ行く先々に祖母の「気配」を感じ、新たな地平で祖母と出会うのです。「家族のテール」を離れ、異種交感の際どい領域を歩きながら、「私」は人に向かって生き、人と結びつき、人の感情の周縁を押し広げて行っているように見えます。